

# まちと、伝統と、未来と

―二つの重要伝統的建造物群保存地区―

2012年、金屋町が国の重要伝統的建造物群保存地区に選定された。  
「鑄物師町」としては初めての選定であり、これで高岡は、2000年に選定された山町筋と二つの重伝建地区を持つことになった。

# 山町筋

# 金屋町

小さな菓子にも、  
幸せを願う思い

高岡市山町筋。かつての北陸道沿いに、土蔵造りの町並みが今も残る。開町の祖である前田利長公が、御車山を与えたことから、「山町」と呼ぶ、商都高岡を担ってきた商家町である。毎年5月1日、7基の御車山が山町を巡行する。  
「子どもの頃は、そのきらびやかさに驚いていました」  
そう語るのは、菓子舗「大野屋」の大野悠さん。創業170余年の老舗の家に生まれ、現在は企画を担当している。昨年は、「高岡ラムネ」を開発・発売した。  
「落雁の木型が千点近くあって、デザインが面白いんですよ。これを活かさないかと考えたんです」  
和菓子には、それぞれ意味があ

## 山町筋

り、季節がある。それを、若い世代に伝えたい。その思いが、ラムネ菓子の「宝尽くし」「貝尽くし」を生み出した。どちらも縁起物で、貝の落雁は雛まつりなどに使われ、子どもの幸せを願う菓子でもある。レシビも大野さんが考え、「大人の味」にこだわった。  
「伝統を継承し守っていくことは、とても重いことですが、味を落とさないことを一番大事にしていきたいですね」と語る。  
また、大学進学で高岡を離れたことで、見えてきたこともある。自分たちの町の奥の深さだ。  
「山町筋には、他にはない歴史と背景があります。もっと勉強して、山町の個性を伝えたいですね」  
小さい頃から「古い物が当たり前にあった」という環境に、今は新しい発見がある。

伝統と新しさの出会いで  
まちは生き続ける

土蔵造りの家として、重要文化財に指定されている「菅野家住宅」。菅野克志さんは、その菅野家の10代目で、「町屋散歩プロジェクト」の代表を務める。  
「散歩というキーワードは、「観光の基本は、そぞろ歩き。ぶらぶら歩けるまちになればいい」と、メンバーで決めました」と語る。  
菅野さんは、山町のまちづくり活動に、10年以上関わっている。「伝統は受け継いでいかなければいけないが、町のためには新しい力を融合する必要があります」。

## YAMACHO-SUJI

こだわりの品と思いを  
山町から発信する

「この家を、ひと目見て気に入って、いろいろな人に見てもらいたいと思いました」と語るのは、「はんぶんこ」の代表、東海裕慎さん。東海さんは、空き家だった土蔵造りの家を改装し、蔵ギャラリー、セレクトショップ、職人・作家支援などの拠点としている。  
「はんぶんこ」は、作り手の思いと使い手の思いを、半分ずつつけて新しいものを作っていくことという意味をこめています」  
図書室や木工の工作室なども作り、いろいろなものづくりのイベントや企画を行っている。また、自分も作家として制作し、工芸都市高岡クラフトコンペで入選した。

「周辺の観光地とのつながりを」  
昨年、土蔵造りの空き家を活用して、インフォメーションスペース「彌栄(いやさか)」をオープンした。高岡大仏の前の通りと山町筋が交差する位置になる。

「ここで作って、ここで作る。山町は、高岡の商人町。その伝統を守って、ここから世界に向けて発信していきたい」と語る。  
東海さんのプロデュース活動が、山町に新しい力を与えている。



**HAN BUN KO (はんぶんこ)**  
家の後ろにある蔵に、はんぶんこがセレクトした品が並ぶ。この蔵は、幕末から明治にかけて建てられたといわれ、明治33年の大火でも焼けずに残った貴重なもの。  
「はんぶんこ」 <http://hanbunko.org/>



東海裕慎さん



インフォメーションスペース「彌栄」  
「彌栄(いやさか)」は、山町の宴席などの挨拶で、「皆様の彌栄を祈念して」と使われるところから付けたとのこと。  
菅野克志さん

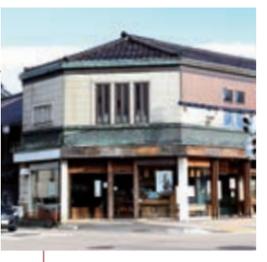
「町屋散歩プロジェクト」 <http://ameblo.jp/machiyasanpo/>

**高岡御車山会館** 2015年春開館予定  
重要有形文化財の高岡御車山を周年展示するほか、御車山の由緒や歴史、金工漆工の技などを紹介する。また、新たに制作している「平成の御車山」の展示も行う予定。  
[関]観光交流課 TEL.0766-20-1304



大野 悠さん

**大野屋の「高岡ラムネ」**  
「宝尽くし(写真)」は、隠れ蓑・米俵・宝珠・打ち出の小槌などの宝物。「貝尽くし」は、貨幣として使われたことから宝物とされる貝を、いろいろ集めたもの。店内には、木型も展示されている。  
「大野屋」 <http://www.ohno-ya.jp/>

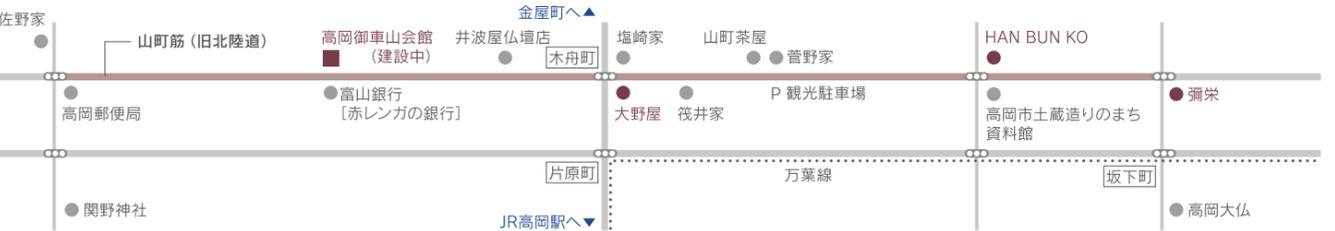


### 高岡山町筋土蔵造りフェスタ

それぞれの町の納涼祭から発展し、山町筋全体で開催するようになったもの。写真は、赤レンガの銀行に投影される映像を背景に、争の演奏が行われた映像ライブ。



(写真右) 大正から昭和初期まで、各家の前には提灯台があり、御車山祭の日に提灯を吊っていた。高岡開町300年(大正2年)に作られたとされ、現在も残る台を参考に、2012年に復元製作した。



# 特集



**「KANAYA」ショールーム**  
高岡銅器協同組合の13社で開発しているブランド「KANAYA」を展示するショールームを金屋町に開設。新作も、随時展示されている。

「KANAYA」 <http://www.kanaya-t.jp/>



**御印祭(ごいんさい)**  
利長公の遺徳をしのび、毎年6月19日・20日に開催される。「御印」とは、藩主の印を押した親書のこと。鑄物の作業歌とされる「弥栄節(やがえふ)」に合わせ、地元の学生・生徒、各団体の人々約1,000人が町流しなどを行う。



## 高岡市鑄物資料館

富山県内初の有形民俗文化財に登録された「高岡鑄物の製作用具及び製品」1,561点を中心に、貴重な資料を展示している。2013年に常設展をリニューアル。職人の心が感じられる多彩な展示となっている。

「問」高岡市鑄物資料館 TEL.0766(28)6088

「あえて、日本語で行こう」と思いました。金屋は、高岡銅器を生業に

## KANAYA-MACHI

美しく風情のある家並み。その魅力は、その町を愛し、活動する人々の思いで磨かれている。

歴史都市高岡の二つの重伝建地区は、それぞれのポテンシャルを持って、今日も新しい可能性を模索している。

金屋は、運命の町  
ここから世界を見据える

現在は、「金屋町楽市」として行われ、多くの人でにぎわう。

また、今回の重伝建地区選定で、山町筋とともに富山の宝として紹介していきたいと語る。

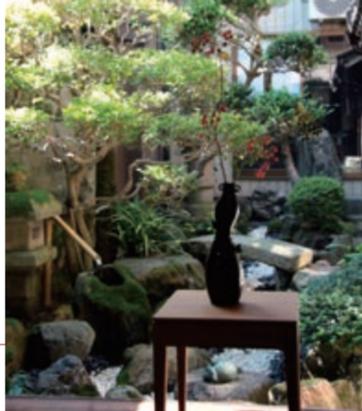
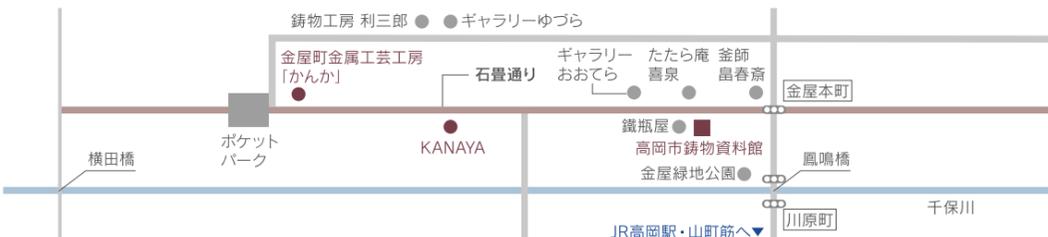
「日本人の心のふるさとになれる、ほっとできる町になりたいですね」

二つの重伝建  
高岡の可能性

金屋町では、数棟の住宅が修景された。山町筋でも、毎年5棟が修景工事を行っている。

「観光客の方が、『また来たい』と思われるような町になれば」と、大野さんは言う。菅野さんは、「商人町として隆盛を誇った山町筋を、活性化することが必要」と話す。

般若さんは、「町を守ること。活気を取り込むこと。それが課題」という。



四津川家の中庭(金屋町楽市)



般若陽子さん

**金屋町の住まい[中庭と蔵]**  
細長い敷地に、「母屋」「中庭」「土蔵」「作業場」の順で建てられていた。これは、作業場から火が出て、土蔵が防火の役割を果たし、逆に母屋の火も作業場へ広げない配慮からと言われる。「中庭は、お客さまのおもてなしをする舞台として、滝や池をつくり、贅を尽くしていたんです」と、般若さんは語る。



## 金屋町楽市

金屋町全域を使って、工芸作家の作品を展示するほか、さまざまなイベントが開催される。それぞれの家にも作品が展示され、さまのこの家の内部を鑑賞することができる。



平戸香菜さん



**金屋町金属工芸工房「かんか」**  
2010年、金屋町の町並みの中に、若手の金工作家たちの制作・展示販売の空間としてオープンした。「県外からのメンバーが多いですね。かんかに参加して、また次へ行ってほしい。他にはない場所です」と、平戸さん。

「金屋町金属工芸工房かんか」  
<http://kanaya-kanka.cocolog-nifty.com/>



平戸香菜さんの作品  
「under skin」  
佐野ルネッサンス鑄金展  
大賞受賞



金屋町石畳通り

## 作品のテーマは「生命力」 自分の表現を求めて

千保川の西岸に、千本格子の家が並ぶ。こは、前田利長公が、産業振興策として鑄物師を招き、宅地を与えて住まわせた町。高岡鑄物発祥の地、金屋町である。

ものづくりの町に、若手作家の創作・展示拠点、金屋町金属工芸工房「かんか」が、2010年にオープンした。メンバーの平戸香菜さんは、茨城県出身。金沢美術工芸大学に入学し、鑄金を専攻。金属を溶かしてものをつくる面白さに魅せられた。

## 金屋町

「吹き」(金属を熱すること)の日の特別な緊張感や、チームを組んでつくるのがいいんです」

大学院を卒業して金沢にいたが、「かんか」が開設した年に、金屋町の空き家に移住した。「金工を続けるなら、高岡以外にいい場所はないと思っただけです」

材料が調達でき、鑄造場があり、金属の作品をつくる環境が、高岡にはある。今、平戸さんは、自分の作品をつくり続けている。

「見た人に、元気を与えられるよ

うな作品をめざしています。前向きな生命力がテーマ」と語る。

平戸さんは、日々の暮らしのなかで、職住一体だった町の空気感を感じていると話す。

**日本の原風景として  
人々の心に響くまちへ**

「金屋町は、道路の拡幅のために家を新しくするより、作業場を郊外に移して、家並みを守ったんです」と語るのには、金屋町まちづくり協議会会長の般若陽子さん。

さらに、町の人々は、「まちづくり憲章」を定めた。家の改修は、町並みに合わせることを取り決めた。「さまのこ(千本格子)」は、金屋町になくはならないのだ。

美しい町並みを見に金屋町を訪れる観光客に、ガイドしていた般若さんは、あることを聞かれた。「さまのこの中には、どうなっているんですか?」

そこで、家の前部分を開放するイベントを考え、「さまのこフェスタ」を実施。家のなかで、作品の展示や茶会などを行い、お客さまを受け入れた。金屋町は、室内も庭も見心えのある家が多かった。

## EVENT SCHEDULE

